

[市民公開講座Ⅱ]

近世大坂の医学——村落への浸透と継続

田中 祐尾

大阪市立大学医学部

田中祐尾と申します。河内の国、若江郡八尾東郷村という在所で代々の村医者を営んだ家系の子孫でございます。本職が開業医でありますので、医史学を学問として分析発表するという作業は苦手であります。では何故このような場を頂いたかという、それはこの代々の村医者がどのような仕事と生活をしていたかについて若干の確証が有りましてそれを示し、その映像を追うという筋書きが可能だからでございます。何処かからお借りしたものは比較するため以外、余りありません。

近世の大坂で歴史に残る医師達と申せば豊臣政権下での曲直瀬道三から始まって、明治維新直前の適塾での緒方洪庵とその門下生辺りまでの人々かと心得ますが、随分と多彩で波乱に満ちた医師たちが活躍致します。古林見宜、戸田旭山、道修町を巡る薬師たち、永富独嘯庵、懐徳堂を巡る人々、小石元俊、橋本宗吉、伏屋素狄、大矢尚斎、斎藤方策、中天游そしてシーボルト一派の高良斎、岡研介、日高涼台、更に適塾を支えた緒方郁蔵、オランダ帰りの緒方惟準といった面々、更に彼を教えたオランダ人ボードイン、それにハラタマ、エルメレンスといった幕末から明治への担い手たち等々。全てを語るには数日を要するほど内容が豊富であります。そこで此処では地方村落へと波及した知識を享受した医師たちが辿った二百数十年間の歴史を村人・庶民の視線で紹介致そうと思ひます。

河内平野は其の名のごとく古代から淀川、大和川両水系の支流が網の目のように広がり浪速津、現在の大坂湾へと抜ける水路が豊富で古代大和朝廷への瀬戸内経由の交通もこれらの水路に負っていました。ところが数年周期で上流の石川や寝屋川といった荒瀬の氾濫がありその都度水稲の収穫に齟齬を来し、江戸時代藩主が定着せず終始代官支配の天領でありました。1704年今米村の庄屋中甚兵衛らの請願により大和川を柏原近辺で西へと迂回さす工事に成功。俄かに1063町歩の新田が得られ、綿作や菜種の栽培も加わって、元もとが温暖で肥沃な土地に農業が栄え、折から勃興した大坂市内淀川河畔の商工業即ち両替商、銅の精錬、各藩の米蔵と米相場、廻船の交易、清国船との貿易などといった都市活性化を農業が補完する形をとって河内地方の農民は大いに潤い富を蓄え、商人や豪農層に学問塾が平野(含翠堂)と今橋(懐徳堂)に、庶民層には郡部を含め数千といわれる寺子屋が乱立します。寛政期には江戸幕府の儒官に三人の学者を懐徳堂から送るといった充実ぶり、当時識字率が世界一だったという研究あり、こういった大坂での知識の浸透がその土台になったこと、特に医師への道は儒学経由の中国医学が本道で、医師またはそれらしき人たちがとくに多かったことに異論はありません。

然しながら医療の質が上がって病者が救われたかどうかという、長崎からの天然痘、コレラ、インフルエンザといった外来疫病の反復襲来。天明期など大飢饉に抛る飢餓や栄養失調の蔓延によって一村での大半の死者を出すといった現実で、むしろ医師への不信感がつのったのです。

八尾東郷村の村医田中元緝(1767~1825)は地元の重岡見昌医師に初期教育を受け、中井竹山、履軒らによる全盛期の懐徳堂で朱子学の薫陶をうけます。同時期に、混沌社を通じて木村兼葭堂ら先端文化人と交わって多くの医書や文物を集めます。18世紀末から19世紀初頭にかけて、日本中の知識人たちが大坂に蝟集滞在し、蘭学の浸透期とも重なり大坂は近世における文化、経済の最盛期を迎えます。ところが商工業と文化文明の興隆は疫病の流行を招き、1783年から五年間天明の大飢饉にも直面、栄養失調による多くの疫病死を如何とも為しえず一村の大半が死亡するといった悲劇が続きます。田中元緝

は1796年父元允を、1801年には最愛のたった一人の妹満智を失います。共に疫病死でありました。

身内に限らず、多くの村人たちを助けえず、無力感と怨嗟の聲にまみれた元緝は懐徳堂での教養を頼りに儒学の教養を超えた儒教への没入を計ります。「招魂再生」という儒教の教義に妹への執愛を委ねたのかもしれませんが。原始の儒教はオカルトが主な仕事でしたが、この時代の儒者のモットーは禅にも似た自己研鑽と日常の「仁の道」に即した生活の純化でありました。

元緝は1796年父元允の死に際して、在所の浄土宗菩提寺、東郷光明寺から大窪の山寺来迎寺の一隅に儒式墓地を、自宅彌性園には儒教の神主位牌と祠壇を設えます。以後田中家は現代まで儒教式埋葬と葬式の形式を継承しています。元緝、元資親子による医療活動は、二千冊を超える医書の読破渉猟、「彌性園方函」という処方集事典の編集、薬草園の経営など多岐に亘り、一般疾病への実効は独特の業績を上げましたが、反復する疫病の襲来には相変わらず無力でありました。勿も、幕末に種痘の普及で天然痘が抑え込まれた以外、現代の抗生物質の出現まで世界中で為された疫病対策とは、迷信の払拭、消毒隔離、保養理論といったものにすぎず、それでも明治期には大きな効果を挙げたという経過があります。

この地方の一儒者の日常生活について言えば、四書五経を読み生活の道を確認すること、趣味として四君子などを描く絵画、横笛や和琴を奏で漢詩を詠む、多くの患者を含めた客を一度にもてなす煎茶道を選び色々な茶器が遺っています。他には玉を彫る篆刻や猿や牡丹といったモデルの未完の作品があります。儒者は武道の研鑽も求められますが、こちらの方は代々苦手だったらしく、数振りの古刀が遺っています。応永期信国作の脇差が代表。

田中元緝が懐徳堂で直接儒教の本質を教えられた師は中井竹山・履軒の兄弟学者ですが、家宗の教科書は浅見綱齋が著した「家禮」という中国本土の家単位の儒教書の和製版でありました。綱齋の師は儒教と神道を習合した「垂加神道」を唱えた山崎闇斎という大儒で、この説は武士階級に大いに受け入れられ、幕末の尊皇国体論へと繋がります。綱齋は河内の楠氏の信奉者として生涯門弟を育てます。綱齋の高弟に水戸光圀を教えた三宅観瀾がおりまして、この人は懐徳堂の初代学主三宅石庵の実弟でありました。このような人脈から伝わった儒教の教養は何時しか田中彌性園歴代当主に「皇国史観」を吹き込み、元緝、元資親子の漢詩集「赤水稿」には尊王の詩が多くみられ、元資の長男新太郎は家を継ぐべきところ、幕末の京洛で尊王攘夷運動に身を投じ、頼三樹三郎、梁川星巖らと交わった揚句安政六年行方不明となります。次男寛二郎、後の寛治郎が後を継ぎ、新太郎には妻も墓もありません。新太郎のものと言われる小刀が現存し、柄は手垢まみれ、鞘はぼこぼこの当たり傷だらけ、家紋の純金製三つ巴の飾りが今も眩しく光っております。新太郎は邸に帰ったところを幕吏に踏み込まれ、すんでのところ土堀を超えて逃げ延びたそうです。

八尾という土地柄は古代儒教集団の大頭目物部守屋の支配地で、587年聖徳太子を奉じて決戦に臨んだ蘇我馬子の連合軍との決戦場でありました。八尾は矢の尾即ち「矢じり」ほか武器の生産地だったという説あり、物部氏の武器庫でもありました。苦戦を強いられた蘇我軍は渋川地区で物部の本陣に奇襲をかけ、太子の射た矢が守屋の喉を射抜いたという出来過ぎた話で儒教集団は滅びます。然しながら既に渡来していた儒教とその政治体系は厳然と主に公卿たちの手で世襲され生き延びます。今でも太子堂、將軍塚、跡部、弓削、刑部（おさかべ）といった地名が残り、聖徳太子の母、穴穂部皇女（あなほべのこうじょ＝用明帝の妃）を祭る穴太（あのを）神社などがあり、田中家の儒墓を含めてこの地での儒教という存在が、決して降って湧いた思想と雰囲気ではなかったというのを感じます。

以上とても語りつくせぬ江戸期大坂、一村医者のほんの歴史の一端をお話しました。